



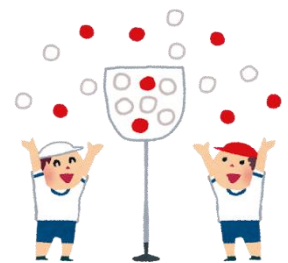
## 本当に子どもが主役の運動会

前川 良太

つばさの運動会は子どもたちに「何したい？」と問いかけるところから始まります。それは、決められたことをするでもなく、できるかどうかの成果を見せる場でもなく、ただただ日常の延長線上にある運動会だからです。それは私自身がアトムっ子だった頃から変わらない風景で、今も鮮明に当時の記憶が残っています。

私が年長のぞう組の時は竹馬をしました。毎日傷だらけになってコツコツ練習をしたのを覚えています。そして本番までに乗れるようになった私は次に“もっと高いのに乗りたい”と1メートル級の竹馬に乗り、それまでできるようになったからと本番は園庭にあった築山の階段を登ると決めたのです。もちろん大人もそこに寄り添って付き合ってくれたのですが、(担任はアトムの看護師の民ちゃん(西口看護師)でした。)私の記憶にあるのは、自分のありようを自分で決めたという確かな実感でした。実は自分でやると決めた階段登りは、当日まで一度も成功しませんでした。そして本番も自分の思うような形で成功はしませんでした。もちろん親も周りのみんなも「すごかったなあ」とほめてはくれました。だけど自分自身は全く納得しませんでした。楽しかったけど悔しい。そんな気持ちで当日を終えたのを覚えています。その後日、園庭に出るたびにまたコツコツ練習した私は、1段だけ階段を竹馬で登ることができるようになりました。執念ですね。今思えばよくそんな危ないことやらせてくれたなとも思いますが、運動会は私にとっても日々の通過点でした。本番のための日々を過ごすのではなく、その中間地点に当日があり、そこで終わりではないのです。

それから30年近く経ち、先月ここに書いた我が家の長男も、今年が年長の運動会です(アトムは運動会ではなくアトムフェスティバルと呼んでいます)。去年は女の子集団にまぎれてポンポンを持って、アイドルダンスを踊った息子ですが、今年はなんと竹馬に挑戦するそうです(今のところ)。運動会その日で終わりではないと書いておきながら、こんなところまでつながるとは私も予想外でした。「パパの竹馬乗ってる写真見せてほしい」と私の古い卒所アルバムを一緒に見ました。私より少しどんくさい息子はなかなか苦戦しているようですが、自分で決めたことだからこそ、どんな形でも応援してやりたい気持ちです。



今年の子どもたちもそれぞれでとっても面白いです。きりん組の子どもたちはなんだか飄々としていますが、実はドキドキ緊張もしています。そんな子どもたちですが、本当に生き生きと楽しんでいる様子を見てもらえんと思います。まさに普段の子どもたちそのままです。

ぞう組の子どもたちはなんだかそれぞれ葛藤もあるようです。悔しかったりうれしかったりドキドキしたり。普段の子どもたちとはまた違った表情です。そして仲間の存在も確かに感じ合いながら取り組んでいます。

集団としてのありようが先にくるのではなく徹底して個に向き合い、集団をつくる。そんなつばさの日々の保育そのものの運動会です。できるかどうかとか、その場限りのことにとらわれずに、どうか過程をじっくり見つめてやってください。当日参加しないクラスの皆さんも、ぜひ応援に来てください。みんなで『私たちの』子どもたちの応援をしましょう。